

# ハーストハウスによる 「規範的な徳倫理」擁護論の検討<sup>(1)</sup>

河谷 淳

## 序 本稿の対象と目的

本稿の目的は、ハーストハウスによる徳倫理擁護論を、徳倫理が「規範性」を持ちうるかどうかという論点に絞って検討することにある。そこで、彼女が文字通りその問題を扱っている論文「規範的な徳倫理」<sup>(2)</sup>を主に参照することとし（これを以下では単に「論文」と呼ぶ）、それと併せて、内容からしてこの「論文」に対応していると思われる、徳倫理についての彼女の主著『徳倫理学について』<sup>(3)</sup>第一部も適宜参照することにした（これを以下では単に「著書」と呼ぶ）。

そこで、本稿では具体的に次のような手順で考察を進めていくことにしたい。まず本論考の前半部では、「論文」ならびに「著書」第一部に依拠しながら、「規範性」の観点からなされる徳倫理擁護論の議論構造を分析し（第一節）、次に本稿の後半部では、徳倫理をめぐる攻防のトポスを参照しながらハーストハウスの議論戦略の性格付けを行い、そのような戦略が「規範的な徳倫理」の擁護にどこまで成功しているかの査定を試みることにしたい（第二節）。

## 第一節 「規範的な徳倫理」擁護論の議論構造

「論文」の主要なねらいは、その序論で述べられるように、「徳倫理は私たちが何をなすべきかを教えてくれはしない。したがって、それは義務論

や功利主義に対する規範としての競争相手にはなりえない」という趣旨の徳倫理批判に対して再反論を加えることで徳倫理を擁護しようとするところにある。

こうした目的を達成するためにハーストハウスは徳倫理批判の論点を丁寧に分析・検討しながら、批判者の側から指摘されている問題点が、実は徳倫理に固有なものではなく、義務論や功利主義にも同様の問題点があることを明らかにすることによって、すなわち「私に向けられた批判はあなたにも適用可能だ」(*tu quoque*)という論法によって、規範としての徳倫理の可能性を探っていくことになる。

ハーストハウスが「論文」で整理するように、徳倫理に対する批判として一般的に想定されるのは、(1) 徳倫理は「正しい行為」を定式化することができない、(2) 徳倫理はいかなる道徳規則ももたらしることができない、(3) 徳倫理では道徳規則の衝突の問題を解決できない、といった論点であるが、まずは、それぞれの論点に対する再反論ならびに道徳的ディレンマをめぐる議論を「論文」の第一節から第四節に依拠しながら順に見ていくことにしたい。

### 1・1 「正しい行為」の特定化をめぐる問題

まず、「論文」の第一節「正しい行為」(Right Action)でハーストハウスが採る具体的な戦略は、「正しい行為」をどのように特定できるのかという観点からすれば、「私たちが何をなすべきかを教えてくれない」といった、徳倫理に対する批判は義務論や功利主義にも同様にあてはまることを指摘するものである。その点を明らかにするために、まず彼女は「正しい行為」の特定に関して「功利主義」(Utilitarianism)と「義務論」(Deontology)の立場をそれぞれ次のような仕方で定式化する<sup>(4)</sup>。

U1. ある行為が正しいのは、それが最善の帰結を促進する場合であり、

かつ、その場合に限る。

U2. 最善の帰結とはそこにおいて幸福が最大化されるもののことである。

D1. ある行為が正しいのは、それが正当な道德規則・原則に一致している場合であり、かつ、その場合に限る。

D2. 正当な道德規則（原則）とは、(i) 以下のリストに挙げられているものである（そして、この後にリストが続くことになる）、または (ii) 神によって私たちに課せられたものである、または (iii) 普遍化可能なものである、または (iv) すべての理性的存在者の選択の対象となるようなものである。

これに対して徳倫理（Virtue Ethics）の第一前提・第二前提は次のように定式化される<sup>(5)</sup>。

V1. ある行為が正しいのは、それが、有徳の行為者がその状況でその性格にふさわしい仕方（つまり、その性格に即して行為しながら）なすようなことである場合であり、かつ、その場合に限る。（An action is right if it is what a virtuous agent would characteristically (i.e. acting in character) do in the circumstances.)

V2. 徳とは以下の内容の性格特性のことである（A virtue is a character trait that ...）

ここでのハーストハウスの議論のポイントは、徳倫理の第一前提（V1）がいかなる実践的な指針も与えないという理由で批判されるのだとすれば、同様の批判が功利主義や義務論の前提にも向けられるはずだということである。なぜなら、徳倫理が「有徳の行為者」を特定しなければならない

い一方で、功利主義はその第二前提（U2）において、何が「最善の帰結」とみなされるべきかを特定しなければならないし、義務論もまたその第二前提（D2）において、何が「正当な道德規則」なのかを特定しなければならないからである。

しかし、それでもなお、徳倫理の第一前提（V1）は行為の指針たりえないという批判がなされるかもしれない。だが、ハーストハウスによれば、私たちが道德的判断に迷った場合に有徳の人たちから助言を得ようとする事実を単刀直入に説明できるのは徳倫理だけであり、正直・思いやり・正義などの具体的な徳に照らし合わせることで、有徳の行為者が個別の状況においてどのように振る舞うのかを理解することは充分可能である、とされる。この見解に従うならば、約束を破ることで利益が得られる場合であっても、そうすることは不正な行為であるがゆえに、そのような場合に有徳の行為者が約束を破ることは決してないのだと言えることになる。

## 1・2 道德規則をめぐる問題

次に、「論文」の第二節「道德規則」（Moral Rules）でハーストハウスが標的とするのは「徳倫理はいかなる道德規則ももたらさない」という徳倫理批判の論点である。というのも、その第一節で議論されていたように、具体的な徳に照らし合わせるならば、「正直に行為せよ」のような具体的な規則が実際にもたらされるように思われるが、徳倫理の批判者たちはそのような規則を、義務論や功利主義の規則の場合とは異なり、正当な規則と認めない可能性があるからである。ハーストハウスはここでも徳倫理の批判者たちがそのように考える根拠を煎じ詰め、そうした論拠が、彼らが思うほど説得力のあるものではないことを次のような観点から明らかにしようとする。

第一に、義務論的な規則が価値評価的な語彙を含んでいないのに対して徳倫理はそれを含んでいる点で問題があるとする批判者側の論拠は、義務

論者が打ち立てる道德規則にしてみてもその規則の内部で評価語にコミットせざるをえない以上、成り立たない。例えば、義務論者にとって「殺すなかれ」という規則は正確に言えば「無事の人を殺すなかれ」のことであり、価値評価ぬきには語りえないことになる。したがって、義務論者が評価語を含む点で徳倫理を論難してみたところでそれは単なる自己批判となってしまう。

第二に、子どもに教えることができるのはその理解力からして、徳倫理の濃密な概念ではなく、義務論的な規則だけであるという論拠にしてみても、「弟にはやさしくしてあげなさい」などの、義務論者でも認めるような子ども向けの具体的な命令内容を考えてみれば事実にはそぐわない。しかし、だからといって、徳倫理が義務論的な規則の有用性そのものを否定するわけでもない。ハーストハウスはこの点で徳倫理は義務論と手を結んで功利主義に対抗できると考えている。彼女によれば、徳倫理が義務論と異なるのは、嘘をつくことを禁止するにあたって、義務論はそれが義務に反することを理由にするのに対して、徳倫理はあくまでそれが不正であったり友情の裏切りであったりするからだと説明する点においてなのである。したがって、彼女の提唱する「規範的な徳倫理」にとってみればこの点はそれほど大きな差異とはならない。

### 1・3 道德規則の衝突の問題

「論文」の第三節「衝突の問題」(The Conflict Problem)では、徳倫理を批判する際に持ち出される道德規則の衝突の問題が吟味・検討される。そこでの批判側の論点は、徳倫理では二つの徳が正反対の相容れない行為を同時に推奨する場合があります、というものである。例えば、正直という徳は、たとえそれが人を傷つけるような真実でも、真実であるかぎりはそれを語るように促すが、親切という徳はむしろそのような真実を語らないように促すかもしれない。だが、ハーストハウスによれば、このような

批判の矛先は同様にして義務論にも向けられることになる。というのも、例えば、義務論においてもやはり「真実を語れ」と「他者に危害をなすことなかれ」という二つの定言命法は互いに衝突するかもしれないからである<sup>(6)</sup>。

この問題に対するハーストハウスの処方箋に従うならば、義務論はこうした衝突が単に「見かけだけのもの」(merely apparent)だとみなすことで自らの立場を擁護しようとするが、徳倫理も同様の戦略を採用することは可能である<sup>(7)</sup>。つまり、そうした衝突は徳を表示するさまざまな語彙の誤った適用によって引き起こされるような、あくまで表面的なものであるにすぎない、ということである。というのも、例えば、人を傷つけるような真実を隠蔽してみたところでそれが親切であることには必ずしもならないからである。

また、「これこれの状況で私は何をなすべきか」という問いにひとつの答えがあるにもかかわらず行為者がその答えを知らない場合があるという論点が徳倫理の批判者から提出されることがあるが、これに対するハーストハウスの応答は、そのような事態は、アリストテレスが主張するような道徳的知識つまりフロネーシス（思慮）の要請、ひいては、ソクラテスが提起した「徳の教授不可能性」にとってはむしろ有利にはたらくことになる、というものである。

#### 1・4 道徳的ディレンマをめぐる問題

「論文」の第四節「ディレンマと規範的な理論」(Dilemmas and Normative Theory)では、道徳的ディレンマの問題についてさらに検討が加えられる。規範倫理が科学理論と比較してどの程度「理論」たりうるかについては論争のあるところではあるが、ハーストハウスによれば、規範倫理と道徳的ディレンマの関係については少なくとも次のような三つの選択肢がありうる。

- 1) 規範倫理は、道徳的ディレンマには解決があるはずであり、それを与えることが規範倫理の仕事であるという信念のもとにディレンマについて考えるよう私たちを導くべきである。
- 2) 規範倫理は、道徳的ディレンマをはじめとして、Wigginsが言うところの「絶対に決定不可能な問題」の可能性のあることをあらかじめ自らのうちに組み入れているべきである。
- 3) 規範倫理は、この問題について当該の規範倫理の二人の支持者の間で理解可能な齟齬があることを許容できるほど十分に柔軟なものであるべきである。

ここでハーストハウスが主張しようとしているのは、少なくとも徳倫理は第三の立場を調停できるはずだということである。そこで検討されるのは次のような思考実験である。今、有徳の行為者の候補が二人いて、一方がAをなし、他方がBをなしたとする。この場合、解決不可能なディレンマなどないと信じる人たちは一方の行為者に徳が欠けていると言うであろうし、解決不可能なディレンマがあると信じる人たちは、両方の行為者が実際に有徳であると想定することができるであろう。したがって、この思考実験によれば、解決不可能な道徳的ディレンマなどないと信じるのであれ、あると信じるのであれ、いずれにせよ徳倫理は両方の場合を調停しながら成立しうることになる<sup>(8)</sup>。

## 第二節 「規範的な徳倫理」擁護論の査定

ここまで主に「論文」に即しながら、ハーストハウスによる徳倫理擁護論のトポスを確認してきたので、本稿の後半部では、徳倫理をめぐる攻防戦におけるハーストハウスの戦略の性格付けを行い、そのような戦略が規範的な徳倫理を擁護するのにどこまで成功しているかの査定を試みることにしたい。

## 2・1 徳倫理をめぐる攻防のトポス

一般的に言って、徳倫理をめぐる批判には少なくとも二つのタイプを見て取ることができよう。そのうちのひとつは、「論文」に即して見てきたような、(A) 義務論あるいは功利主義を擁護する立場（あるいはそれ以外の非徳倫理的な立場）からなされる批判であり、もうひとつは、(B) プラトン、アリストテレス、ヘレニズム哲学をベースにしながら現代版の徳倫理を構築しようとする立場からなされるタイプのものである。つまり、一方では徳倫理とそれ以外の倫理的アプローチとの間で交わされる論争があり、他方では徳倫理陣営内部での論争がありうる。

前者の場合つまり徳倫理そのものを批判する陣営は、依然として徳倫理が功利主義や義務論のような規範としての定式化・理論化にはそぐわないことを理由に徳倫理批判を展開することになろうし、後者の場合、論争者たちは基本的には徳倫理擁護の側に立ちながらも現代人が古代ギリシアに対して行き過ぎた憧憬を抱くことに警鐘を鳴らしつつ、現代の私たちが古代ギリシアの徳倫理、典型的にはアリストテレス倫理学をどのように理解すべきなのか、その何を・どこまで継承すべきなのか、それに依拠しながら現代版の徳倫理はどのように理論化されるべきなのか、といった諸問題をめぐって争うことになる。

「論文」において直接の論敵とみなされているのは、言うまでもなく前者の義務論あるいは功利主義の立場であった。「論文」の構成に即して整理しておくならば、(1)「徳倫理は正しい行為を定式化することができない」という批判は義務論と功利主義の両方から提起されうるものであり、(2)「徳倫理はいかなる道德規則ももたらさない」という批判は主に義務論の側から提起され、そして、(3)「徳倫理では道德的な衝突の問題を解決できない」という批判は功利主義の側から徳倫理のみならず義務論に対してまでも向けられた批判であった。

このような批判に対して、すでに見たようにハーストハウスは(1)に



対しては徳倫理を実際に規則化・定式化してみせ、(2) に対しては同様の批判が批判者自身にも同様にし向けられることを示し、(3) に対しては義務論の方に歩み寄りながら道徳的な衝突が「見かけだけのもの」であることに訴えることで功利主義からの批判に応答しようとしていた<sup>(9)</sup>。

このように「論文」での主要な論争相手は義務論や功利主義なのだが、その一方でことがらとしては徳倫理陣営内部の論争を無視するわけにもいかない。そのひとつの論争点は、徳倫理の源泉であるアリストテレス倫理学をどのように理解すべきなのかという問題である。ハーストハウス自身がアリストテレス倫理学の「解釈」を「論文」や「著書」において目指しているわけではないとしても、自分の立論がアリストテレス倫理学と明らかな不整合をきたすと受け取られるのはおそらく心外であろう。実際のところ、ハーストハウスは少なくとも三つの概念規定をアリストテレスから継承していると「著書」において明言している。すなわち、(1) 英語では 'happiness' や 'flourishing' と訳されるような「エウダイモニア」の概念、(2) 「徳」(アレテー) の概念ならびに (3) 行為の理由や動機付けに関する「理性的／非理性的」の区別の三つである<sup>(10)</sup>。

しかしながら、現代の分析哲学的な形而上学が「新アリストテレス主義」(Neo-Aristotelianism) を標榜しながらもアリストテレス哲学そのものからは比較的自由であるように、「新アリストテレス主義」としての徳倫理も(形而上学の場合よりは拘束力がやや強いように思われるが) アリストテレス倫理学そのものからは比較的自由であって、そのため、徳倫理の陣営も多様であり一枚岩ではない<sup>(11)</sup>。たとえアリストテレス倫理学の基本的枠組みを継承するとしても、現代人にとっては、古代ギリシアの奴隷制を継承する必要がないのは言うに及ばず『ニコマコス倫理学』第2巻第7章で挙げられているような徳のリストをそのまま継承する必要もない。ハーストハウスの徳倫理の定式に即して言えば、その第二前提(V2)の空白部分を埋めるような徳目は、儒教的な徳目の再評価の問題も含めて、

文化相対的に、ある程度の多様性が許されるであろう。また、そもそもハーストハウスがアリストテレスから継承しているとする「エウダイモニア」や「アレテー」はその内実の解釈をめぐって現在でも古代哲学研究者の間で論争的であり続けている。さらに、現代の徳倫理に対して貼られてきた「行為者中心」(agent-centred)、「よい性格」の重視、などのレッテルも再検討を迫られることになるだろう。

## 2・2 「規範的な徳倫理」擁護論の射程

「論文」におけるハーストハウスの目的は、その冒頭でも述べられていた通り、「徳倫理は何をなすべきかを教えることができないがゆえに、功利主義や義務論に匹敵するような、規範としての競争相手にはなりえない」という趣旨の徳倫理批判の吟味・検討であった。ハーストハウスが、徳倫理を定式化した上で、徳倫理批判の論拠を逆手に取ってそうした批判が功利主義や義務論にも同様にして向けられることを明らかにしたかぎりにおいて、すなわち、そうした*tu quoque*論法が効力を発揮しうるかぎりにおいて、この目的は部分的には達成されたように見える。また、徳倫理の規範性を確保することは、生命倫理などの応用倫理に対する徳倫理の可能性を積極的に開くことにもつながるだろう。実際にハーストハウスが徳倫理の立場から妊娠中絶の問題を論じていることはよく知られている<sup>(12)</sup>。

こうしたハーストハウスの議論のうちには二つのベクトルを見て取ることができよう。それぞれは先ほど分析した想定反論のトポスに対応しており、そのひとつは、「論文」や「著書」で顕在的に議論されていたように他の倫理学的アプローチを批判的に検討する方向性であり、もうひとつは、その背後にあるモチーフであって、一般的に理解されている「徳倫理」概念に異議申し立てを行いながらその再規定を目指す方向性である。換言するならば、徳倫理をめぐる論戦のいわば合戦図においてハーストハウスが占める位置は「功利主義／義務論／徳倫理」という三つ巴の一角(徳倫理)

であると同時に「徳倫理以外の倫理的アプローチ／様々な徳倫理／規範的な徳倫理」という三つ巴の一角（規範的な徳倫理）でもある。

このような議論の戦略を通じて彼女は、徳倫理に従来貼られてきた、「行為中心」ではなく「行為者中心」、「～すること」よりも「～であること」の重視、「正しい行為」よりも「よい性格」の重視、などのレッテル<sup>(13)</sup>を再検討しながら、むしろ、そうしたレッテルをいったん引き剥がしてすることで、義務論や功利主義を同じ土俵に引き込み、それらとがっぷり四つに組もうとする。さらに、そうした同じ土俵上の取り組みにおいては総当たり戦での優勝を目指すのではなく、義務論の側から歓迎されるかどうかはともかく、義務論と共同戦線を張ることで功利主義に対抗する戦略を採用しようとする<sup>(14)</sup>。その文脈では「真実を語れ」や「他者に危害をなすことなかれ」といった定言命法はそれぞれ正直、思いやりまたは親切といった徳に置き換え可能なものとなる。

以上のような彼女の戦略についてまず指摘しなければならないのは、徳倫理に一定の規範性を確保するという彼女の目的にとってはそうした戦略が取りも直さず諸刃の剣になってしまうということである。というのも、このような論戦の仕方は徳倫理の規範性を積極的に確立するというよりは、むしろ、徳倫理の規範性つまりコード化可能性という側面に光をあてることで、徳倫理を他の倫理的アプローチと同じ土俵に載せながら、同時に、*tu quoque*論法によって倫理一般の規範性そのものにも疑念を投げかけその規範性の効力を弱めようとするものだからである。このことは、一方で徳倫理の規範化を図りながらも他方で「強いコード化可能テーゼ」(the strong codifiability thesis) すなわち (a) 規則は決定手続きを与えるべきであり、(b) 規則は徳なき人にも適用可能なものでなければならない、というテーゼをMcDowellに従って拒絶するハーストハウスの立場そのものに起因している<sup>(15)</sup>。そのため、規範性という視点から徳倫理を擁護するという趣旨からすれば、そのような戦略に基づくハーストハウスによる

再反論の効力が限定的なものとならざるえないことは最初から予想されていたことである。

また、ハーストハウス自身の意図とは独立に、こうした論争の場ではそもそも徳倫理を「規則に従う」というアスペクトでとらえてよいのかということ自体も問題となろう。というのも、例えばAnnasが指摘するように<sup>(16)</sup>、徳倫理の源泉であるアリストテレスは規則にそれほど重きを置いておらず、「規則に従う」だけでは人を有徳にするのに十分だとは考えていないからである。

この問題に対するひとつの視点を与えるものとして、『ニコマコス倫理学』第4巻第9章で「羞恥」が徳ではないと言われる文脈を取り上げてみたい<sup>(17)</sup>。アリストテレスによれば、悪しきことを行おうとする人が羞恥のゆえにそれを行わないような場合（その人は社会で流通している一般的な道徳規則を意識しておりその点では規則に従っていると言えるかもしれないが）その人物が有徳な人であるとは必ずしも言えない。また、善いことをなさないのが恥ずかしいからという理由で善いことをなす場合にしても同様である。なぜなら、義務論と徳倫理の差異を説明する際にしばしば例示されるように、規則に従って「親切に」振る舞う人やその行為を「親切な人」や「親切からの行為」とは必ずしも言わないからである。

確かに一面では、羞恥が若者にとって果たす徳育的效果というものをアリストテレス自身も認めてはいるが（そして、アリストテレスのそうした議論とは独立に、この点でV1が徳なき人にも効力を持つとは言えようが）、それでもなお、「羞恥からの行為」と「徳からの行為」はアリストテレス倫理学において区別されている。例えば、無恥な人については言うまでもないが、他人から臆病だと思われることを恥じるがゆえに勇敢にそれらしく振る舞う人と、純粹に勇敢に振る舞う人とは、やはりそのあり方において異なっていると言うべきであろう。そこでは、規則に従っているかどうかそのものが重要なのではなく、規則に従う場合にしても、その従い

方こそが重要なのである。そうだとすれば、徳倫理の本質はむしろ規範化できない部分にこそあることになる。

結局のところ、ハーストハウスは「論文」で、徳倫理が「私たちが何をなすべきか」を教えることができると積極的に結論づけているわけではないし、道徳的知恵、つまり、『ニコマコス倫理学』第6巻において知的な卓越性のひとつとして挙げられるフロネーシス（思慮）が有徳な行為者には必要であることを彼女は認めてさえいた。そこにはソクラテスによって提起された「徳の教授不可能性」というギリシア哲学ではおなじみの問題が伏在しており、こうした論点は徳倫理の規範性を強調しようとするハーストハウスの立場からすればむしろ都合の悪いものとも映りかねない。少なくとも、ハーストハウスがこの「論文」で確立しようとしていたのは、あらゆる道徳的ディレンマを解決できる決定手続きを与えるべきかどうかという問いに異なる見解がある場合でも、それらを調整できるほどに柔軟な、規範的な徳倫理が成立する可能性であった。徳倫理のこうした規範化の試みは、むしろ、そこではコード化しようにもコード化できないような徳倫理の側面を逆照射的に明らかにした点において意義があるのだと言えることができるだろう<sup>(18)</sup>。

- (1) 本稿はホモコントリビューエンス研究所「貢献する気持ち研究レポート」の一編としてウェブ上に公開された原稿に加筆・修正をほどこしたものである (<http://www.homo-contribuens.org/jp/kyodokenkyu/>, 2013年10月11日掲載)。
- (2) Rosalind Hursthouse, 'Normative Virtue Ethics'; in Roger Crisp (ed.) *How We Should Live Our Lives* (Oxford, 1996). ただし、本稿において直接参照したのはJames P. Sterba編集によるアンソロジー：*Ethics: The Big Questions*, 2nd edition (Wiley-Blackwell, 2009) に再録されたものである。
- (3) R. Hursthouse, *On Virtue Ethics* (Oxford, 1999). (邦訳：土橋茂樹訳『徳倫理学について』、知泉書館、2014年。)
- (4) Cf. *On Virtue Ethics*, 26-7.
- (5) Cf. *On Virtue Ethics*, 28-31.
- (6) カントが「人間愛のためなら嘘をついてもよいという誤った権利に関して」という有名な論文で、こうした二つの義務が衝突する状況においてさえも嘘をついてはならないと主張したことはよく知られている。
- (7) Cf. *On Virtue Ethics*, 52.
- (8) 「著書」の第一部第3章「解決不可能なディレンマと悲劇的ディレンマ」では、有徳な人でさえも抜け出すことのできないような「悲劇的ディレンマ」においても、徳倫理は行為の評価に関して一定の説明を与えることができると論じられている。
- (9) このようなハーストハウスの議論に対しては、徳倫理批判者からの再反論も想定される。例えばJohnsonは（彼なりに理解された）V規則が完全に有徳な人にのみあてはまる原則であるため、それが徳なき人にも適用されるような一般的な道徳規則としては機能しえずそこでは自己改善的な行為を語る余地がないという理由から、V規則を含む徳倫理を批判する (Robert N. Johnson, 'Virtue and Right', reprinted in Sterba (ed.) op. cit. from *Ethics* 113/4 (2003), 810-34.)。この論文につ

いては、篠澤和久「ロバート・ジョンソン「徳と正しさ」の主要論点」  
（「貢献する気持ち研究レポート」）を参照。

- (10) *On Virtue Ethics*, 9-14.
- (11) 徳倫理の擁護者たちが一枚岩ではないという点については次の論文  
集が参考になる。Mark Alfano (ed.), *Current Controversies in Virtue  
Theory* (New York, 2015).
- (12) 'Virtue Theory and Abortion', *Philosophy and Public Affairs* 20  
(1991), 223-46. (邦訳：林誓雄訳「徳理論と妊娠中絶」、江口聡編・監  
訳『妊娠中絶の生命倫理』、勁草書房、2011年、215-247頁。)
- (13) Cf. *On Virtue Ethics*, 25.
- (14) さらに、「著書」第二部第4章「アリストテレスとカント」では、  
道徳的な動機付けに関してアリストテレスとカントが一般に思われて  
いるよりも近い関係にあることが論じられる。
- (15) *On Virtue Ethics*, 56-7.
- (16) Julia Annas, 'Ancient Ethics and Modern Morality', *Philosophical  
Perspectives* 6 (1992), 119-36, reprinted in Sterba (ed.) op. cit., 428-9.  
この論文については、加藤尚武「J. アナス論文 (Ancient Ethics and  
Modern Morality) の要旨と問題点」(「貢献する気持ち研究レポート」)  
を参照。
- (17) 「羞恥」に関するアリストテレスの立場については以下の拙稿で論  
じたことがある。「アリストテレス倫理学における「羞恥」の位置付け」、  
駒沢大学『文化』第27号、2009年、41-56頁。'The Place of Fear and  
Shame in Aristotle', *Japan Studies in Classical Antiquity*, The Classical  
Society of Japan, Vol. 1 (2011), 99-110.
- (18) 本稿はハーストハウスの「論文」あるいは「著書」第一部の論点整  
理とその検討を目指したものであり、言うまでもなく、「著書」第一  
部～第三部で展開される議論全体の整理・検討としては不十分なもの  
である。それについては稿を改めることとしたい。